

---

# MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 9 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON・3『WOLF MEET VAMPIRE』<9>

### 【Zコード】

N1337M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

遂に謎の青年 和人との出会いを果たした秀。しかし、和人は後に『もう一人の自分』を『目覚め』させてはいけない、と言つ。

『WOLF MEET VAMPIRE』 v9.8 (前書き)

趣味です（—¥）。。。。

<9>

深い霧の中だった。

秀は一人、立ち尽くしていた。

自分はこれから何処へ行けばいいのだろう・・・

些細な疑問が脳裏を掠める。

まるで、母親とはぐれてしまつた迷い子の心境だった。

オフィスに戻れば、仲間たちがいる。

帰るう・・・そうは思つても、心の片隅に言葉に出来ない空虚感が残る。

何故だろう・・・今までこんな事一度だつてなかつた。

オフィス（あのばしょ）以外を求めるなんて。

では - - - どうして今まであの場所に固執してきた?

仲間たちがいるから?

仲間たちが - - - 『人間』だから・・・?

マギレティレバ カラレナイ・・・?

では、自分は『何者』?

何処へ行けばいい?

秀はじつと、自分の右手を見つめた。

誰かが・・・長い間自分が待つていたとも思える、誰かの手が、差し伸べたこの手を力強く掴んでくれた気がする - - -

『彼』は、何処?

あれは、夢だったのだろうか・・・。

もう一度、秀はゆっくりと前方の白い闇の中へ手を差し伸べた。

ふいに、夢は途絶えた。

眩しそうすぎるオレンジ色をした光が、眼前に広がる - - -

「秀・・・？気がついた？」

光が、女性の声で尋ねた。

「・・・・・さやか。」

秀は心配そうに自分の顔を覗き込んでいた、その眼差しに気づき、

「どうして・・・ここにいるんだ、俺。」

今一つ、記憶が定かでない。

さやかは、ほつとした表情でソファの脇のテーブルからホット・ミルクを取り、秀に差し出した。

「ここはオフィスよ。安心して。」

「オフィス？・・・青山なのか。」

彼は微かに痛みの残る体をソファの上で起こし、辺りを見回した。確かに - - - ここは、スタッフがミーティング・ルームに使っている20畳ほどの洋室である。

壁のポスターは、秀が撮影したモデルのものである。

彼は、はつきりとしない頭を振り、

「何だつて俺は青山なんかにいるんだか - - 昨日の夜は、新宿にいたんだぞ。」

「相当酔つてたみたいね、その様子じや。」

さやかは、ホット・ミルクを冷ましながら口に含む秀の姿を見つめ、呆れた様に言った。

「だから、歌舞伎町なんかでチンピラに喧嘩売つたりなんかするのよ。お酒を飲んで友好関係を深めるのは構わないけど、今後は相手を選ぶ事ね。」

「ひどいなあ、さやかちゃん。」

秀は、口を尖らしてそっぽを向いた。「だつて、あれは向こうが悪いんだぜ。セオリ一通りの、肩が触れたの、触れないのつて - - -

と、呟き、ふいに黙り込む秀。

「乗せられたあなたが悪いんでしょう？ 一人で帰れないくらい、痛めつけられちゃって……秀？」

さやかは、無言の秀に気付いた。「どうしたの？ 急に黙りこいつがちやつて……」

「……歌舞伎町で？ 僕が酔っ払ってヤクザと喧嘩した……？」

記憶が……どこか違う。

それは、自分の『記憶』ではない……

秀は、何故かそう思った。

その瞬間……あの忌まわしき呪われた人々の姿が目の前を走つた。

「さやか！ 僕をここに連れて来た奴は？」

秀は、胸元の毛布を撥ね退け、立ちあがって言った。「和人は？ 帰したのか？」

「まさか。せっかく、あなたが見つけたのに……応接室に引き留めてあるわ……ちょっと、秀つ！」

さやかの言葉を聞き終える間もなく、秀は廊下に飛び出していった。一つ角を曲がり、クライアントを迎える部屋へと飛び込む。

がちや……

カーテンが閉じられた薄暗い室内を、静寂が支配していた。後ろ手で、ドアを静かに閉じる。

秀は、僅かに細めた目を部屋の中央に位置するソファへと向けた。そこには、一人の青年の姿があった。

『来客』にも気付かない様子で、長い睫毛を伏せ、ソファの肘掛に身を任せている。

「……」

秀は、静かに和人へ近づいて行つた。

彫の深い顔立ちと、永遠に眠りから覚めないので、とも思える穏やかなその表情。

戸惑いがちに、彼の足下に片膝を付き、眠りを妨げないよつに  
しかし、このまま目を開けないのでは、といつ不安に駆られ、彼  
の頬に右手を当ててみる。

「 - - - - - 」

和人は - - - ゆつくりと、目を開けた。

秀は何故かほつとして、

「和人 - - - 」

彼の名を呼んだ。

和人は、秀の顔を確かめると微笑した。

「傷はもう大丈夫なのか？」

「ちつとも。」

秀は苦笑し、彼の横に腰を降ろした。

「大した事ないさ。理由は解らないが、俺、昔から異様に回復力  
が強くてさ。」

と、言いながら大きく両腕を天井に向けて伸ばす。「ガキの頃は、  
喧嘩だつて負けたことないんだぜ。」

「そうか。」

和人は安心して言った。「なら、良かつた - - - ジや、俺、帰る  
よ。」

「ちよつと - - - !」

既に秀の横を離れてドアに向かつて歩き出した彼を、秀は慌てて  
引き留めた。

「まだ、話があるんだ。」

「モデルの話？」

和人は、ため息混じりに白いジャケットの肩を竦めた。「朝子か  
ら聞いたよ。ずっと俺の事、探してたんだつて？新宿中を。」

「朝子 - - - ?」

秀は首を傾げ、それから思い当つた様に、「ああ、あの彼女！朝  
子さんつて言うんだ - - - お前さんの『運命共同体』。」

秀は首を傾げ、それから思い当つた様に、「ああ、あの彼女！朝  
子さんつて言うんだ - - - お前さんの『運命共同体』。」

「『運命共同体』？」

和人は呆れた様に、「一体何つー表現するんだ、あいつは……。

「

「モデルの話はもちろんだけど……」

秀は急に真顔に戻り、「昨日のあいつら……一体、何者なんだ？」

？」

「……。」

和人は微かに沈黙した。

それから、

「どうしてそんな事を聞く？」

彼は秀の質問には答えず、逆に問い合わせ返した。「あれは、一夜の悪夢とでも思つて忘れる。その方がお前のためだ……。」

「ちょっと、待てよ。」

秀は、彼の前に立ちふさがつた。

悲しみと激しい怒りを込めた眼差しを和人に向け、

「俺の『記憶』を入れ替えたのはお前だな……。」

「……。」

「何で、そんな事した！俺の友人は、昨日のあいつらに殺されたんだ！」

和人はその澄んだ瞳に同様の色を浮かべた。

「じゃ……、昨日、俺を尋ねて新宿へ来たのは……。」

「……本当は、俺が殺されるはずだつたんだ……。」

悔しげに唇を噛み締めて、俯く秀。

陽光は10cm程開けられた大通りに面したガラスをすり抜けて、カーテンの隙間から2人の姿を暗い室内に浮かび上がらせていた。沈黙の時が、つかの間続いた。

「……すまない。」

光は、和人の碧色の目を細めさせた。「だったら、尚更だ。俺と関わり合いにならない方がいい。どういう訳かは知らないが、もう、俺に近づくな。」

「！ - - - むかつ腹の立つこと、言つてくれるじゃないの。」

秀は乱暴に和人の左肩を掴んだ。「俺の友達は！ 貴史は！ あんたに関わったために、殺されたんだぜ！ よくもまあ、いけしゃあしゃあと、傍観者氣取つてそんな事言えるねつ！」

「だから、お前にも忠告してるんだ！」

和人は秀の手を払いのけ、彼に負けない程の強い口調で言つた。「これ以上、俺に關わつてみろ！ お前の友人や、多発している『通り魔』如きの被害者になるんだぞ！」

「こいつ - - - ! 脅してるのでよ。」

「脅しじゃない！」

和人の瞳が、秀の瞳を釘付けにする。「昨日の件でお前にも解つてはすだ。その相手が、到底『人』の力の及ぶべき『存在』ではないことに - - - 」

「・・・だから、何だつてんだよ・・・！」

秀は、Gパンのポケットに両手を突っ込み、仁王立ちで和人に言った。「友達を殺されて・・・その相手が得体の知れない『化け物』だからつて、大人しくしていろいろつて言うのかよ・・・あんたに俺の気持ちがわかるか？」

わかるか？

アイツ ハ - - - タカフミ ハ - -

オレ ノ イレル ”バショ” ノ ヒトリダツタ - - -

それから何も言わず、和人の横をドアへと向かつて通り過ぎようとする。

「どうする気だ、秀。」

「お前が何も言わないのならそれでもいい。」

秀は、すれ違いざまに横目で和人を睨む。「俺一人で貴史の敵をとつてやる - - - 夜を待つて、あいつら全員ぶつ殺してやる - - -

「待て、秀！」

部屋を去ろうとする彼を、今度は和人が引き留めた。「やめろ  
- 敵なら俺がとつてやる。」

「本当、腹立つね！ 関わり合いになるなって言つたり、代わりに  
敵をとつてやるだなんて！ 子供ガキじゃねえんだぞ、俺は。化け物でも、  
矢でも鉄砲でも持つて来いつてんだ。まとめて秀さんが、片付けて  
やる。」

「違うんだ、秀！」

銀色のドアノブに勢い良く手をかける、秀。  
その手の上に和人の手が重なる。

「俺が心配してるのは、お前の中の - - -

そう言つた時。

風に煽られた白いカーテンが、大きく揺らめいた。

一気に室内へ流れ込んだ煌めく陽光が、予期せず、和人を直撃す  
る - - -

「! - - -

和人は、急に体のバランスを崩し床へ倒れそうになつた。

慌てて秀が、その細い体を支える。

「和人！？」

秀は、自分の胸元で固く目を閉じる彼に声をかけた。

「 - - - 大丈夫。」

和人は、一度、大きく深呼吸をして答えた。

それから静かに目を開き、心配そうに自分の顔を見つめる秀に言  
つた。

先刻の台詞の続きを - - -

「 - - - 秀。お前自身気付いているはずだ。自分の中のもう一人  
の『自分』に。」「もう一人の『自分』 - - - 。」「そう。」「そう。」

和人は瞳で頷いて秀の呟きを肯定し、「『闇』の『血』を持つ、  
もう一人の『自分』 - - - それは決して『目覚め』させてはいけな

い! 昨夜のように - - - 「 - - -

- - - - -

和人の言葉に反応して、もう一人の『自分』が体の中で再び動き始めたことを、秀ははつきりと感じていた。

『WOLF MEET VAMPIRE』 v9.8 (後書き)

趣味でした(ー￥)。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1337m/>

---

MOON-3『WOLF MEET VAMPIRE』<9>

2010年10月11日16時38分発行